SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.27
2019.11

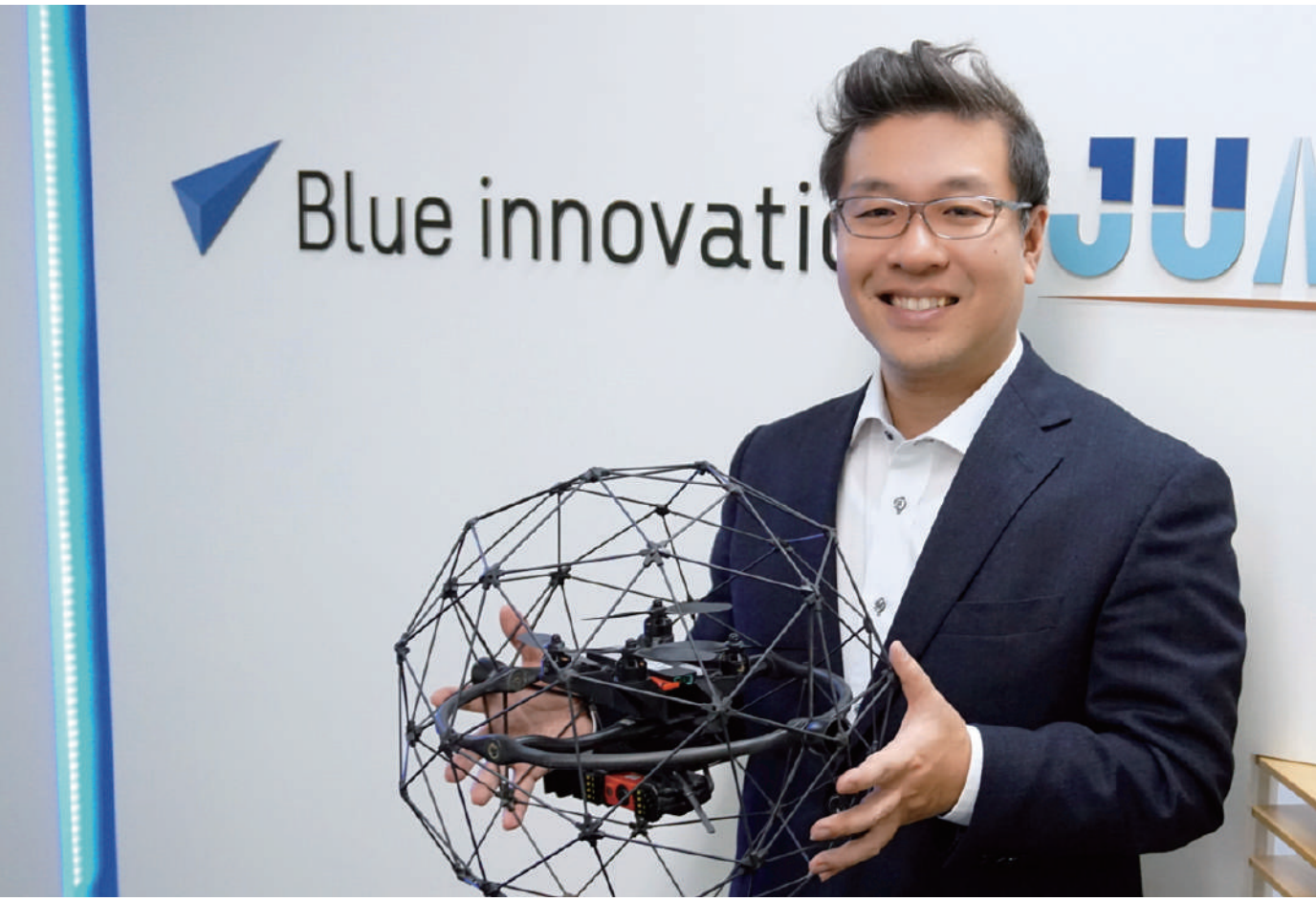
ドローンとともに、次の社会を

Take Free

ドローンとともに、次の社会を

ブルーイノベーション株式会社　代表取締役社長 熊田貴之氏

インタビュー・文／片山清宏・片山久美



「空の産業革命」と言われるドローン業界で今最も注目されている人物がいる。ブルーイノベーション株式会社　代表取締役社長　熊田貴之。日本におけるドローン業界のパイオニアとして、1999年の会社設立以降、ドローンの設計・開発や、センサ・アプリケーションの研究開発、ソリューションの提供まで幅広い分野を担っている。

熊田は、どんな道を経て「ドローンの革命児」となったのか。そしてドローンとともに羽ばたく今後のビジョンを追いかけた。

父からリーダー教育を受けた幼少期

1976年、埼玉県さいたま市生まれ。幼少期の熊田は、運動が得意なサッカー少年、野球少年だった。小さい頃からいつもグループのリーダー的存在だったという。その根底には、幼少期に父から受けた「リーダー教育」があった。

「父からは、社会に出ると『主』と『従』の関係があって、そのこと自体に良いも悪いもないけど、私には『主』の側の人間になり、多くの人をリードしなさいと小さい頃から言われて育ちました。リーダーになるチャンスがあれば常にそちらを選択しなさい！と。小学校５年生のときに児童会の副会長選挙に立候補したんですがを、迷っているときに父に相談したら『絶対やるべきだ！』と即答でしたね（笑）」

児童会の副会長選では、大人顔負けの選挙戦を繰り広げた熊田。選挙期間中は、毎朝タスキをかけて

校門前で『みなさん、おはようございます』と挨拶をし、全校生徒向けの選挙放送も行った。

「今でも覚えているんですけど、放送室で選挙放送の撮影をしているとき、あまりにもライトがまぶしくて頭が真っ白になっちゃって。思わず、『ちょっとタンマ!』って言っちゃったんですね。それが、全校生徒に放映されちゃって、子ども心ながら、『おれの人生もう終わったな、恥ずかしくてもう死にたい!』って思いましたよ(笑)。案の定、聞いていた生徒はみんな爆笑でした」

結果は、選挙で競い合っていたサッカー部、野球部の両部長よりもインパクトがあったようで、2人を上回る得票を得て、特に部活動をしていない『無所属』の熊田が見事当選。この恥をかいた経験がもとで、当選後は、全校生徒の前でのプレゼンの猛特訓を父と行い、今では人前で堂々と話すことが得意になり、当時の経験が役に立っているという。

香港に家族で移住、揉まれた日々

児童会でも持ち前のリーダーシップを発揮して活発な活動をしていた熊田に、小学5年生の時、大きな転機が訪れた。父の仕事の関係で、家族で香港に移住したのだ。

「当時香港は世界の『へそ』と言われ、総合商社をはじめ多くの日本の大企業が進出していました。私は香港日本人小学校に入りましたが、学校では目立った者が評価される校風でしたから、みんな自分の意見をしっかり持って主張する強者ばかり。一流企業の子息が多くて、優秀な友人に揉まれた日々でしたね。

現在は、米国大学の教授になっている友人や、国連職員など、今でも同級生のネットワークは世界をまたいでつながっています。会社の財務や広告に関することは香港時代の友人にいろいろと手伝ってもらっていますし、実は今の取締役と監査役は、香港時代の知り合いなんです。香港で培った人脈が会社の素地になっています」

熊田は3年半の香港移住生活を終え、日本に帰国後、日大豊山高校に入学。そこでは、カルチャーギャップに苦しむことになった。

「香港では目立ってなんぼの世界でしたが、日本では目立つと『あいつ、何がんばっちゃってんの?』と、やや冷たい目で見られる印象が当時はありました。ですので、考えてみると帰国後、高校時代は控えており、一回もリーダーというものをやっていませんね。この時は、香港と日本の校風のギャップにいかに順応するかで必死でした」

恩師と出会い海岸侵食の研究に没頭

大学へは、当初、有名な日本大学の建築学科へ進学するつもりだったが、高校の担任の先生の助言により理工学部に新設された海洋建築工学科へ進学。この選択によって、その後の熊田の人生は、「海」へ大きく梶を切ることになる。

「『熊田くん、これからは海洋の時代だよ。絶対この学科は伸びる!』と言われたんですね。担任は古文の先生だし、今思えば根拠はなかったと思います（笑）。入学後、海洋建築工学科を創設した佐久田先生という素晴らしい先生に教えをいただく御縁に恵まれました。とても可愛がってくださって、先生に出会ったおかげで、勉強嫌いだった私が『研究って面白いな』と思うようになったんです」

先生から勧められた研究テーマは「沿岸域に生育するマングローブ」。熊田はマングローブの研究中に見たある光景にショックを受け、さらに研究に没頭し、大学院に進むことになる。

「研究でタイとベトナムに調査に行った際に、洪水後に家が流されている状況を見ました。豆腐みたいに地盤が柔らかいところ（シルト層）に家が建っているから、一度洪水が起こると大災害になってしまうんです。災害後の状況にショックで、それがきっかけで河川・海岸の侵食のメカニズムに興味を持ち、大学院では『海岸侵食』の研究をしようと。自分の研究で一人でも多くの命を救いたい、研究を災害対策に役立てたいと思うようになりました」

博士課程では、国土交通省国土技術政策総合研究所の宇多高明先生と出会い、海岸侵食問題をテーマにした共同論文を発表し、世界的に高い評価を受けた。当時、海岸侵食について研究している研究者は学内にはおらず、熊田は、海洋建築工学の中に新たな一分野を作ることとなったのである。

「実は、博士課程に進むべきかはかなり迷っていたのですが、当時、父は迷わず『ドクターに行け!』と言ってくれたんです。母は家計のこともあり『頼むから就職して!』と言っていましたが（笑）。結局、母方の祖父が博士過程の費用を全額出すと援助を申し出てくれました。世界的な評価を受けた私の博士論文は、家族の協力があったからこそできたものです」

商売の面白さに目覚めた大学院時代

両親に『大学院中の生活費は自分で稼ぐ!』と宣言した熊田は、研究のかたわら、家庭教師や塾講師のアルバイトをしながら生活費を稼ぐ生活だった。研究も忙しくてなかなか思うように稼げず、銀行の貯金が千円切っていて下ろせないこともあった。現在の妻である当時付き合っていた彼女と、2人ですいとんを作って食べて過ごしたきつい時もあった。

「時間も無かったので大学で内職できる仕事はないかと考えた時に、大学の先輩には、コンサルタントやゼネコンに就職していた方がたくさんいたので、先輩のところに行って、『大学で内職できる仕事ください!』って営業したんです。そうしたら、千葉県外房で開催される住民協議会で防波堤の高

さを議論する状況をビデオ撮影して編集する仕事をもらったんです。私にとって生まれて初めて個人で受託した仕事」

熊田はビデオ編集で２時間程度の作業で15万円を得た。

「商売は儲かる！と目覚めて、研究室の後輩と一緒に海岸防災に関わる受託事業を始めました。初年度は年間70万円の売上、３年目には300万円を売り上げました。私が稼ぐことの楽しさを知り、事業の面白さを知った瞬間でした」

「震災バブル崩壊」で倒産危機

稼ぐことの楽しさを知った熊田は、父の「『従』ではなく『主』の人間になれ」という幼い頃の教えどおり、大学院博士課程修了後、サラリーマンを経て海岸防災のコンサルタント事業を起業する。

「2011年に東日本大震災が起きて、災害復旧に対して多額の国家予算が割り当てられました。震災後の３年間は『震災バブル』と言えるくらい本当に仕事が多かったです。津波のシミュレーションや住民協議会の運営、全国で立ち上がった津波対策の委員会、協議会の事務局。それこそ寝る間もないくらいの仕事量でした」

しかし、震災後３年ほど経つと、仕事が激減していった。同業の会社がバタバタ倒れていく。海岸ではプランニングから施工のフェーズに入り、調査、予測分析などを手掛ける熊田の事業の仕事は無くなってしまったのである。

「本当に仕事がなくなりました。生まれて初めての挫折でした。お金がなくなるとお客様やビジネスパートナーとも険悪な雰囲気になり同業仲間内でいがみ合いが始まります。正直、倒産すると思いました」

ドローンとの運命的な出会い

当時、海岸の予測分析をする際に使用した空撮は、１～３年に１回程度のセスナ機撮影の航空写真しかなかった。しかし、災害原因を究明するときは災害直後の写真が重要となる。何か良い撮影方法がないかと考えていたときに、熊田は、東京大学航空宇宙工学科の鈴木真二教授と、そして東大開発のドローンとの運命的な出会いを果たす。

「鈴木先生は、もともと御巣鷹山の日本航空123便墜落事故をきっかけに、翼などが折れて無くなっても自動で飛ぶ飛行制御技術を研究されていました。その実験として作られた飛行制御搭載のラジコンが今のドローンなんです。当時はまだ飛行ロボットと呼ばれていましたが、パソコン上で高度と飛行経路を設定すれば何回でも同じ位置を飛行してくれる優れものでした」

ドローンの産業用途がまだ考えられていなかった当時、熊田は、鈴木先生に『ドローンを活用した海岸モニタリングシステム』を提案。先生の、「面白いからやってみよう！」の一言で新しい挑戦が始まったのである。

「初めて操作した時は、ドローンが見えなくなるぐらい遥か向こうに飛んで行くのに、ちゃんと自動で戻ってくることに驚きました。さらに、ドローンを使って低空で撮影した写真はセスナ機で撮影した写真よりも明瞭だし、動画も撮れるから波の動きも撮れます。波長、周期、流速などもわかるようになりました。使ってみてすぐに『これは画期的！この技術を使う時代が絶対に来る！』と確信しました」

Yahoo!JAPANとの共同開発で一躍有名に

経営難に苦しんでいた2013年、Yahoo!　JAPANから「全方位スカイパノラマコンテンツ作成」の相談を受けた。ブルーイノベーションのドローンを活用し、スマートフォン向け「Yahoo!地図」アプリ内で、福岡ヤフオク！ドーム内の上空から野球場を俯瞰したり、観客席から360度のパノラマ画像でグラウンドの様子を見渡すことができるコンテンツサービスである。メディアにも大きく取り上げられ、この報道をきっかけに「ブルーイノベーション＝ドローン」として知名度が上がっていき、ドローン事業の発展へつながっていったのである。

「ドローンが大きなうねりになったのは、国連がドローン（無人機）を『航空機』とみなしたことでした。今まで飛べなかったところ、使っていなかった空域を使えるようになる。『空の産業革命だ！』と世界中が湧きました。でも、日本ではまだ『何だドローン？』という感じで、国でも航空法を改正する気配はありませんでした。先行してルールを改正した国でドローン産業が発展してしまえば、日本は乗り遅れてしまうと危機感を感じました」

熊田は、「国が動かなければ自分たちでやるしかない」と産官学でコンソーシアム「一般社団法人日本UAS産業振興協議会（JUIDA）」を立ち上げ、委員会を通して検討を重ね、ドローンの安全ガイドラインを作成し、世の中に発表した。このガイドラインはその後、ドローンが首相官邸に落ちたことをきっかけにできた航空法改正に大きく貢献した。

さらに、JUIDAでは日本初となるドローンの操縦士および安全運航管理者を養成するドローンスクールの認定制度を設立し、ドローン産業の健全な発展のために、ドローン運航上の安全に関わる知識と、高い操縦技能を有する人材の養成を行っている。

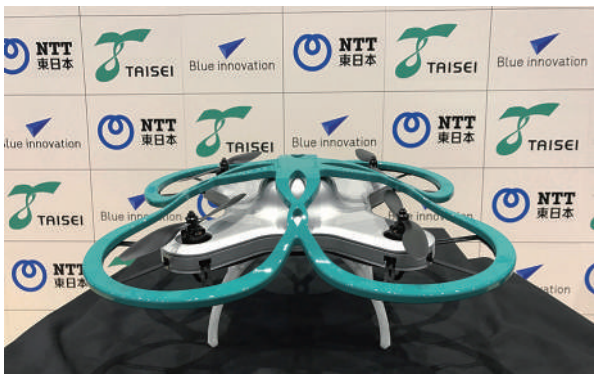
「ドローンパイロットライセンスの制度を考えるときに、自動車業界の本を読んで、自動車教習所のビジネスモデルを勉強しました。自動車の運転免許はカリキュラム受講から合格までを教習所、免許の発行は運転免許センターが担っています。これを参考にしようと。JUIDAがライセンスを発行する免許センター、JUIDA認定ドローンスクールが教習所の役割を果たしています。初年度は、ドローンスクール10校、認定者100名を出すのが目標でしたが、結果的に３年で220校のドローンスクールが誕生し、9,700名ものドローンパイロットライセンスを発行する国内最大、世界でも例が無い最大規模の組織になりました」

このビジネスモデルは世界的に注目され、世界20カ国以上から問い合わせが殺到。すでにシンガポールにJUIDA認定のドローンスクールが新設されている。

「想像を超えた成果でした。自動車教習所のビジネスモデルを参考にしたんですが、今は自動車教習所がドローンスクール事業をスタートするというおもしろい現象が起きています。イノベーションが起きるときは、われわれの想像をはるかに超えた不思議なつながり、機運がありますね」

ドローンとともに、次の社会を

「そう遠くない未来、たくさんのドローンが自由に空を飛び、ロボットが社会の隅々まで行き渡り、人の暮らしを支えるインフラとなる時代が来ます。このとき、無数のドローン／ロボッ



トが、互いに干渉することなく、安全で確実に行動するための技術が必要となってきます。ぼくらブルーイノベーションは、このような将来を見据え、ドローン／ロボットによるオートメーション化社会を実現するための基幹的なプラットフォーム『Blue Earth Platform（BEP）』開発に取り組んでいるんです」

BEPを基軸に、点検、警備、物流、教育・安全、エンターテインメントの５つの分野でサービスを展開しているブルーイノベーション。ドローンのシステムインテグレータとして、さらに先を見据えた研究開発や取り組み、ドローンやロボットが人の暮らしを支える社会の実現をめざしている。

「自分は海岸侵食の研究をしていたので、『海の環境活動』にも貢献していきたいと思っています。国際環境認証「ブルーフラッグ」を取得しているスペインのビーチでは、ドローン会社と協力して、ライフガードの監視、救助、捜索をドローンで実施する実証実験が始まっています。オーストラリアでは、ドローンから音を出してシャークが逃げるシステムをドローン会社が提供しています。『テクノロジー×海難救助』『テクノロジー×環境』など、掛け算で今までにないイノベーションを生み出し、社会に貢献していきたいですね」

成功の要諦は「危機意識を持つこと」

急成長を続ける熊田の会社は、それだけに、大きな変化にも常に直面している。経営者として大事にしていること、成功の要諦を聞いてみた。

「経営者としては強烈なビジョンやゴールを設定して、毎秒、毎分、『行動を止めない』ことも大事ですが、それより、常に危機意識を持って経営に当たることが大切だと思っています。順調なときでもあえて危機を作り出すような気持ちを持っています。あとは、社長として、今あることをそのまま受け入れるようにしています。アクシデントがあったとき、『最悪だ』『こんなはずじゃなかった』と意味づけをしてしまうと、自分のフィルターを通して物事を見てしまう。あるがままに受け入れれば、『この出来事は自分にとってすごい成長の機会かもしれない』とか、『緊急時のときでも成長する良い会社になる機会になる』とかいかようにも捉えられるんです」

最後に経営者としての「やりがい」を聞いた。

「やりがいは、やっぱり自分が頭の中で描いたものが、自分の言葉を通して、いろんな人に伝わり、実現していくことですね。建築の設計士みたいな感じ。強く願って発信し続ければ、世界をより良くすることだってできると思うんです。でも、反対に自分がマイナスなことを発してしまうと、それが人々を通じて、社会に悪影響を与えてしまうことになる。常に経営者としての自覚と責任を持っていたいと思います」

熊田の夢は、ドローンとともに次なる高みへ上昇を続けていく。（了）

——ついに登場。

狭小空間の点検を安全に、効率的に、低コストで。
ELIOS2 は直感的に操作でき、正確に飛行できる屋内点検用ドローンです。点検員を危険にさらすことなく、また簡単な訓練を受けるだけで、質の高い点検が可能です。過酷な現場での使用に耐えられる高い信頼性を誇ります。

お問合せは
ブルーイノベーション株式会社
TEL　03-6801-8781
MAIL　info@blue-i.co.jp

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.27
2019.11

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：片山清宏
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：片山清宏　片山久美

http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org

SHONAN VISION vol.27 | 2019年11月号 2019年11月25日発行 発行：NPO法人湘南ビジョン研究所 〒251-0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3-9-29 shonan-vision.org